

國學院大學學術情報リポジトリ

香取神宮の神社組織と『香取神宮神幸祭絵巻』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉永, 博彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002333

香取神宮の神社組織と『香取神宮神幸祭絵巻』

吉永博彰

はじめに

下総国(千葉県北部、茨城県南部)一宮とされた、中世香取神宮(香取社とも)の祭礼行列を描いた『香取神宮神幸祭絵巻』(以降「神幸祭絵巻」と略す)には、七つの諸本がある(笹生衛「『香取神宮神幸祭絵巻』とその諸本」参照)。これら神幸祭絵巻は香取社という中世東国の有力大社の祭礼行列の様子を今に伝えるとともに、「権檢非違使家本」等の注記(書き込み)からは、同社の社内組織における職掌・身分をもうかがい知ることができる。

ここでは、本学所蔵「神幸祭絵巻」の描写を中心に、「権檢非違使家本」の注記を参照しながら、祭礼行列の構成及び、中世後期から近世初頭にかけての同社の神社組織についてみていきたい。

一、神幸祭絵巻にみた祭礼行列の構成

本学所蔵の絵巻は諸本との比較から、冒頭部の津宮や「御船木」、「八龍神」「大楯」を描く場面を欠くことがわかるが、絵巻より見て取れる行列の構図の概要は、おおよそ次の通りである。

①神馬 ↓ ②馬上の社家(田吟・押領使・酒司・正権の檢非違使)及び従者 ↓ ③仁王門付近で祭礼行列を査閲・臨視する「国司代」「宮介」と供衆・徒武者 ↓ ④馬上の社家(八人檢杖ほか)と従者 ↓ ⑤馬上の上級社家(副祝・大祝・物申祝)、内院神主と従者・供衆 ↓ ⑥馬上の女性祀職(物忌・八乙女)と従者、芸能奉仕者(獅子・八人女・歌人) ↓ ⑦旗持、神輿と担ぎ手、馬上の社家(大神主ほか)と従者 ↓ ⑧馬上の最上位の社家(権禰宜・大禰宜・神主)と従者・供衆・隨兵(徒・騎馬武者) ↓ ⑨社殿と留守役

こうした構成は祇園御霊会など京都の御霊会系統の祭礼の波及ともされる(岡田莊司「御旅所祭祀」参照)。

馬上の上級社家には、花飾りをした長柄の傘が差し掛けられ、太刀持ほか御供が付くのの基本とした。特に神主・大禰宜・権禰宜の三人には、前記の供衆ほか、引馬(飾り立てた馬)、袋に入れた弓を手にする騎馬武者、長柄の杓持・薙刀持、狩衣姿の馬上の社家、面を付けた命婦、隨兵として騎馬武者・徒武者の付き従う様子が見て取れる。これらの装いに関係して、室町期の鎌倉公方・

足利成氏が地方へ赴く際の行列には、多くの従者・供衆とともに、長刀(薙刀)及び柄長杓(柄長瓢)を手にした力者(従者)が付き従っており、柄長杓は、公方に水を供するため供奉したとされる(享徳三年(一四五四)『殿中以下年中行事』)。

また、東国の有力大社の一社である諏訪社(現、諏訪大社)の五月の祭礼行列に於いても、最上の祀官である大祝が柄長の杓と引目(鐺矢)を持った力者二人を引き連れており(諏訪大明神画詞)、長柄杓や薙刀、弓矢を持った力者を従える装いは、身分の高さを示すものであったと考えられる。



騎乗した大禰宜と従者・供衆の様子
(『香取神宮神幸祭絵巻』)

近世には途絶した神幸祭の詳細な様子を文献史料からは読み取れないが、本絵巻により、鎌倉公方ほか中世の東国社会に見られた貴人の装いが、香取社でも最上位の社家に供奉する装いとして、祭礼行列を構成していたことがうかがえよう。

二、香取神宮の神社組織と「神幸祭絵巻」

次に、香取神宮の社内組織について述べたい。

神幸祭絵巻に注記の見える神職を始めて、社内組織の全容がわかる文献史料に、絵巻の成立より年代は下るが、天正十九年（一五九一）「香取社人六官三奉行以下員数事」が挙げられよう。

同書は、徳川家康の関東入国に際して提出された、香取社の社人名簿・社領配分帳に当たる。「社人」とは字の示す通り、神社に属する人々を指した。その構成は以下の通りである。まず、主要な社人の職掌・役職には、次の四つがある。

六官 権禰宜 物申祝 国行事 大祝 副祝 惣検校

奉行 権之介 行事禰宜 高倉目代 正・権検非違使

三奉行 祿司代 田所案主

内院 大神主 四郎神主 二郎神主 小井戸神主

中幣神主 堀口神主 大長手 六郎神主

神主・大禰宜を最上として、上級神職である六官がこれを補佐した。また、六官の下には奉行の役が置かれ、特に、文書作成・記録に当たった祿司代・案主に田所を加えた三人は三奉行と称され

た。続く内院神主は、神座近くで奉仕する神職たちで、神幸の際には弓を手に騎乗して、大神主のみ神輿の側に随行した。

その下には下級神職層及び、専門的な技能・職能を以て奉仕する社人層の「惣之座」「正判官」が置かれた。このほか、「神幸祭絵巻」にはみえないが、神主・大禰宜支配に属した「供僧」「社僧」もあり、神宮寺を中心に仏事に修していた。

こうした神職層に対して、絵巻の中で異彩を放つのが、国司代と宮介であろう。国司代とは国司（朝廷から派遣された行政官）の代官のことである。



仁王門付近の国司代(中央右下)及び宮介(中央左上)、並びに従者・供衆
（『香取神宮神幸祭絵巻』）

国司は国衙（国司の役所）に在って行政と軍事、祭祀を司り、香取社など国内の有力神社の管理・維持・祭祀の執行を保護・監督し、平穏祈願と臨視を兼ねて祭礼に参会した。一方の宮介は「日本民藝館本」の注記より、「千葉」氏であると知れる。千葉氏は下総国で栄えた武士の一族で、その分流には香取郡の在地領主・（矢作）国分氏がいるため、宮介とは国分氏のことであつたと推定される。

すなわち、「神幸祭絵巻」に描かれた国司代と宮介による神事参会からは、香取神宮の神幸祭が、下総国の国衙や在地領主とのつながりを意識した、公的かつ権威のある重要な祭礼であつたと見て取れる。よって、この場面は一宮の祭礼ならではの光景を描く、重要な箇所であるともいえよう。以上の点から、装束などの細かな描写に関しては、諸本の整理分析に基づく検討の余地が残るものの、中世香取社の祭礼を知る上で、「神幸祭絵巻」がいかに有用な資料であるかがわかるだろう。

【参考文献】

- ・香取神宮社務所編『香取群書集成』第三巻（香取神宮社務所、一九八〇年）
- ・『神道大系神社編二二 香取・鹿嶋』（竹内秀雄校注、神道大系編纂会、一九八四年）
- ・『平成二十七年特別展 香取神宮―神に奉げた美―』（千葉県立美術館、二〇一五年）